

ふれあい散歩道－16

〔JR南武線・小田急線登戸駅～柏屋（鯰の絵・なまずの絵）～

丸山教～紀伊國屋（五反田節）～枡形山（輝け杉の子）〕

1, 北向き地蔵と馬頭観音

南武線と小田急線の交差する登戸駅から小田急線のガードをくぐって商店街を進むと、堤防の方から来る道と交差する。

その四つ角の左側に北向き地蔵のほこらがあり、其の地蔵と馬頭観音が並んで建っている。地蔵は西向きが一般的で、北向きはご利益があり子どもを守ってくれる。いわゆる「子育て地蔵」として信仰されている。



馬頭観音は文政10年（1827）の建立で、この近在の馬子の総もとじめであった近くの浴場経営者、手塚氏の先祖が馬の霊をなぐさめるために建てたものである。

台石をみるとこの近辺だけでなく、八王子、府中の人々の名も刻まれている。荷物輸送の中心的役わりを果たしていた登戸宿の馬方たちのようすがしのばれる。

登戸駅付近からこのあたりまでの間は、ひとむかし前までは葦の茂る大きな沼で、古老によればヒシ藻が一面に生え、カモも良く集まったという。多摩川が乱流していたころの名残で、今の堤防ができた後も堤の外に沼があった。南武線がしかれる時に、この沼は埋め立てられたが、つい最近までは低湿地が残っていた。現在の登戸駅前からは、そんなことは想像もできない。（かわさき散歩より引用）

ひとむかし前までは葦の茂る大きな沼で、



登戸駅から徒歩で15分ほどの所にある生田緑地の「菖蒲園」

2, 巖谷小波 (いわやさぎなみ) 「なまず」の句碑

巖谷小波 J R 南武線登戸駅・小田急線向ヶ丘遊園駅北口下車。両方とも徒歩約5分。結婚式場・うなぎ・若鮎の川魚料理でも名高い柏屋は津久井街道に面した老舗である。最近鉄筋三階に近代化された。街道沿いの白壁土蔵の傍らに高さ120センチくらいの根府川自然石に刻まれた文豪巖谷小波の句碑が建てられている。



柏屋フロントにある飯田九一画「鯰」



柏屋正面玄関にある巖谷小波作「鯰」
(なまず)
の句碑

(句 碑) 「小春日和や 日本一の 腹加減」

巖谷小波賛 飯田九一画

「小春日和や日本一の腹加減」の小波讚にぴったりの飯田九一画「なまず」が泳いでおり、柏屋を訪れる人々への味の魅力は十分である。碑陰にはつぎの誌がある。

1932年(昭和7)吉辰 登戸俳句会建之贈 柏屋峰吉氏・そして伊藤葦天外22名の俳句会の名が列記してある。

1932年(昭和7)秋頃向ヶ丘遊園で句会があり、そのあと柏屋で鯰料理を食した。

(スッポン煮)

飯田九一が鯰の絵を描き、そこに同席していた巖谷小波が即興句「小春日和や日本一の腹加減」を揮毫しました。

(追記) スッポン煮: 「なまずを切り身に焼いてから煮る食べ方が大変評判であった。」

(柏屋のあゆみ)

登戸は多摩川と多摩丘陵を背景に自然に恵まれた地形でかつては旅人が宿場として利用していた由来と歴史を持つ地域です。

当時周辺では、農業の傍ら大工・左官業・下駄作りを営む職人の待町として栄えていました。そうした兼業農家でもあった柏屋は1830年(天保元年)頃宿屋を開業いたしました。

以来代を重ね、伝統の川魚料理を受け継ぎながら結婚式場や会席料理への道を拓き、時代の変化に合わせて地元の皆様と共に生き、伝統の味今も伝えております。

「日本料理 柏屋:しおり」より引用

【J R 南武線・小田急線登戸駅下車徒歩10分】

3, 丸山教「葦天」の句碑



【句 碑】

ひとりだけ

残りし信者

炉辺親し

J R南武線登戸駅下車徒歩10分。小田急線向ヶ丘遊園駅下車徒歩7分。川崎市立登戸小学校にいく少し手前に丸山教本庁がある。芝生に三つの句碑が並んでいる。向かって右側が葦天の句碑である。葦天の句碑は、昭和49年4月21日に除幕されました。そして6月17日の午後に数え年91歳で帰天いたしました。

4, 佐藤紅緑句碑



【句 碑】

天地の

初め焔を

誰が打ちし

紅緑先生の句碑は昭和46年4月の建立で、裏面には建立の年月日と、佐藤惣之助・柚里柚里・當麻答郎・伊藤葦天と4人の弟子の名が記されています。

5, 佐藤惣之助「雲雀の句碑」



【句 碑】

句碑の句の

中より雲雀

鳴きいでよ

丸山教本庁の芝生の庭に、佐藤紅緑の句碑「天地のはじめの畑を誰が打ちし」がある。昭和46年4月、紅緑の門人佐藤惣之助・伊藤葦天等によって建てられたもので、この句碑の除幕式のときに惣之助が詠んでいます。



丸山教本庁の花



丸山教本庁の藤の花

6, 紀伊国屋と五反田節 (小田急線向ヶ丘遊園駅北口下車 徒歩約10分)

【歌碑】

五反田の酒屋の小娘子

鳥なれば巢もなかけたや

五反田の境のあの榎

榎にはつたがからまる

娘には殿御がからまる



今は現存していませんが、小泉橋を渡ると府中街道の十字路際にモダンな五階建てのビルがありました。川魚料理と五反田節で知られる紀伊国屋である。創業は文化年間といわれ、そのころは津久井街道を絹問屋が馬の背に荷を乗せて、さかんに通っていた。それに目をつけ旅人相手の店をかまえたのが、初代の喜左衛門で、国元の紀州(和歌山県)の酒屋紀伊国屋ののれんを分けてもらったという。五反田とはこの辺の地名で、二ヶ領用水をこえるともう登戸ではなくて、生田の地域にはいる。

都々逸の文句にも

「こまえ(狛江)と思えど心の駒が いつか生田の紀伊国屋」
とある。川向こうの狛江からも人をひきつけたようすがうかがえる。

追記：現在は、モダンな五階建てのビルはマンションに変わっております。この土地でおめでたい時に唱われた五反田節の歌詞を刻んだ碑は移設され大切に保存されております。

(川崎市総合文化団体連絡会発行「かわさき散歩：花と歴史をたずねて」より引用)

7, 枳形城址 (小田急線向ヶ丘遊園駅南口下車 徒歩約15分)



枳形山の櫻



枳形山のさくら



枳形山の桜



枳形城址



枳形山展望台



伊藤葦天句碑

伊藤葦天句碑：右 「馬場あとも やかたのあとも 秋の風」



枳形山の「輝け杉の子」



小田急線伊勢原 大山の「輝け杉の子」

1944年(昭和19)の夏、国の考え方を受けて、東京だけでなく神奈川県でも大都市である川崎・横浜・横須賀の三市で、学童を集団疎開させることが決められた。川崎市で、35校あった国民学校のうち、24校の3年生以上6年生まで、7千人余りの学童が171か所に分かれて疎開することになった。一番多くの学童を入れてもらう大山町では、3千人以上をむかえると町の人口が急に増えるので、宿舎・食料・燃料から汚物の処理まで色々な問題が持ち上がっていた。しかし、大山町の人々の理解と協力により、ようやく受け入れてもらえることになった。大山が疎開の場所選ばれたのは、緑が多い山なので安全であること、子どもを受け入れられる施設が多く有ることだった。(中略) こうして学童疎開は1945年(昭和20)9月まで続いた。9月にはいと、毎日のように引き取りの人がやってきた。・・・10月26日、先生は、何か決心でもしたかのように部屋に入ってきて、「10時の電車で、川崎に向かいます。したくをしなさい。」と、おっしゃった。ただうれしくて妹と手を取り合ってよろこんだ。夕方川崎駅に下りると「町がなくなっていた」。目の前は、空襲で変わり果てた焼け野原だった。(以下略) (参考・大山町で疎開生活をした学校及び人員) 大師：513人・向：149人・宮前：340人・旭町：360人・富士見：261人・御幸：270人玉川：221人・平間：126人・住吉：352人・・・ 合計：2592人 (川崎市学童疎開副読本「輝け杉の子」

より引用)

(参考資料) 各氏のプロフィール (いずれもHPより引用)

1, 巖谷小波 (いわやさざなみ)

1870年7月4日(明治3)～1933年(昭和8)9月5日

明治・大正期の作家、児童文学者。本名は季雄(すえお)別号に漣山人(さざなみさんじん)東京麴町生まれ。

巖谷家は近江水口藩の藩医の家柄で、父一六(いちろく)は明治政府の高級官僚でのち貴族院議員、書家として著名であった。少年期より文学に興味を持ち、裕福な家庭に育った。独逸学協会(現獨協中学・高校)へ入学するも、医者への道を歩ませられることを嫌い、周囲の反対の中で文学を志して進学を放棄し、1887年(明治20)文学結社の硯社に入る。

尾崎紅葉らと交わって、機関誌「がらくた文庫」(がらくたぶんこ)に「五月鯉」(さつきこい)などの小説を発表したが、少年少女のセンチメンタルな恋愛を描く作品が多かった。

(以上巖谷小波(いわやさざなみ)HPより)

2, 飯田九一 (いいだくいち)

横浜市出身の日本画家の故飯田九一(1892～1970)は、俳人画家としても活躍され、俳諧関係の収集家でもありました。氏のコレクションは、県史編集室が寄託を受け、神奈川県文化資料館を経て、現在、県立図書館が保管しております。

コレクションの内容は、図書・雑誌(1081冊)、軸物(89本)、一枚物(272枚)、器(80点)、飯田九一関係(120点)、その他であります。なかでも、芭蕉、其角、蕪村等の真跡を含む俳諧関係の短冊のコレクションは、専門家のあいだでも、あらゆる分野の俳人、画家、文化人などの短冊も網羅して収集されています。神奈川県立図書館では、このコレクションの目録を第一集「図書・雑誌等之部」、第一部「短冊之部」として刊行しています。

3, 伊藤葦天 (いとういてん)

1883年(明治16)11月17日生まれ～1974年(昭和49)

神奈川県橘樹郡登戸村(川崎市)生まれ。

日本大学を卒業後、明治41年に丸山教第3代教主になり、伊藤六郎兵衛を名のる。葦天の号を使い、俳画やあ郷土史研究を行う。飯田九一や佐藤惣之助と親交があり。昭和47年に第1回川崎市文化賞を受賞する。

(参考文献)

- ・『伊藤葦天句集穂』(伊藤葦天/著俳句研究社)1959
- ・『伊藤六郎兵衛』画集伊藤六郎兵衛/著伊藤六郎兵衛 1966
- ・『稲田郷土史』伊藤六郎兵衛/著稲田郷土史刊行会1970

(資料)

短冊：『松の芯まで 噴水の 上がらんと 葦天』

4, 佐藤紅緑

1890年(明治23)東奥義塾を中退、青森県尋常中学校(現弘前高等学校)に入学。1891年(明治26)、遠縁に当たる陸羯南を頼って上京、翌年日本新聞社に入る。正岡子規の勧めで俳句を始める。1895年(明治28)、病により、帰郷、東奥日報社に入り、小説、俳句などで活躍。1896年(明治29)、東北日報社(翌年河北新報社)の主筆。1900年(明治33)、報知新聞社に入り大隈重信に重用される。記者活動の他、俳人として活躍。大デュマ、ヴィクトル・ユゴーなどの翻訳もする。1905年(明治38)、記者生活を止め、俳句研究会を起す。小説「あん火」「鴨」など自然主義風の作品により注目を浴び、1908年(明治39)から1914年(大正3年)まで、新派の本郷座の座付作者を勤める。(以下略)

5, 佐藤惣之助

佐藤慶次郎・うめ夫妻の二男として出生。佐藤家は川崎宿(現川崎市川崎区)の本陣を預かる家柄であった。佐藤紅緑に師事し俳句を学び、1916年(大正5)に最初の詩集である『正義の兜』を出版。翌年には、第2集である『狂へる歌』を出版。1933年(昭和5)1月、妻の花枝が死去。同年萩原朔太郎の妹、萩原愛子(アイ)と再婚。作曲家、古賀政男と組み多くの楽曲を世に送り出す。1938年(昭和13)には、久米正雄、林房雄、河口松太郎らと中国へ従軍記者として赴く。義兄朔太郎が死亡した4日後、脳溢血で急逝。享年51歳。なお、川崎信用金庫本店の所在地が佐藤惣之助の生家跡であり、同敷地内に「佐藤惣之助生誕の地碑」が建てられている。

(参考:代表的な作曲)

- ① 大阪音頭(歌:藤本二三吉) ② 赤城の子守唄(歌:東海林太郎)
- ③ 月形半平太の唄(歌:東海林太郎) ④ むらさき小唄(歌:東海林太郎)
- ⑤ 白衣の佳人(歌:ディックミネ) ⑥ 緑の地平線(歌:楠繁雄)

(続:輝け杉の子) 其教師の日記妙

【大山:小田急線伊勢原駅から大山行バス終点下車した後ケーブルカーに乗車する】

・大山町疎開児童360名を引率して向かう。伊勢原より大山町までの2里は炎天下にて子供には酷。気遣いつつ進む。幸い一人の落伍者もなし。(19年8月21日 月)

(追記:先日大山から伊勢原まで炎天下のもと歩いてみました。下りだったとはいえ少しこたえました)

・そろそろ家を恋しがる者あり。目に涙をたむる女兒。ご飯の量少なく余計家を恋しがるか。やりきれぬ也。(8月23日 水)

・午前11時半頃被爆。吉川寮生徒即死。(20年5月19日)

・午後授業終了後、裏山に防空壕をひとりで掘り始める(6月6日)

・六男、Aが主犯で米、豆粕の盗食い。調べてみると生米一握り50銭で売買。何とか腹一杯食べさせたい。(6月18日)・・・

・大山から再疎開、極秘に事は進んでいるらしい。(6月26日)

(川崎市学童疎開副読本「輝け杉の子」より引用)

以上